
空を飛びかう手紙

桜岩 琉歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空を飛びかう手紙

【Nコード】

N3753S

【作者名】

桜岩 琉歌

【あらすじ】

誰でも上を見たら当たり前前にある空を通して、人と人がつながっていく。

そんな世界を、広げたくて。

遠くても気持ちは届く。かもしれない。

出会は空を通じて（前書き）

海を隔てて愛し合った恋人達がいた。
彼らはとても幸せな時間を共有し、突然、別れを告げた。
しかし彼らは、なお愛し合っていた。

出会は空を通じて

海の方こうつて言うと何かへん。同じ国なのにね。不思議だね。
島国だから仕方ないんだけど。

彼女はは遠くにいる彼を思い出して呟いた。
聞く者はいない。

少し冷たくなつた9月の空に消えた声。
夏に消えた記憶をなぞつた声だった。
はじまりのことは覚えていない。

ただブログに載せた写真が気にいって、どちらともなくアドレスを
交換した。

彼らは互いのメールアドレスしか知らなかった。
しかしそれで充分だった。

幸せだった。

確かに好きだった。

でも、今は過去形。背を向けて、歩き出すことを選んだ。

拝啓。

れいくん、お元気ですか？

あなたの道を進めていますか？

わたしは今から、少しあなたとの記憶の中を旅しようと思います。
いいですか？

．．．いいよね、少しくらい。

鍵が錆びて記憶の宝箱開かなくなる前に。

突然の提案

最初のメールはただの自己紹介だった。

ーレイです (^ - ^*)

交換ありがとう！

なんて呼べばいい？

I s a t o m i です。

こちらこそ。

サトでいいです。本名交換しますか？

返事は速い。

ー俺はレイでいいよ。

つか、本名だから！

さとみも本名だろ？

ー本名言った覚えはないですけど・・・

ーいいーからいいーから

よろしくなー！

勝手に締めくくられたっけ。
わたしの名前、みさとですけど。名前入れ替えただけですけど。
まあいいや。信じないし。
そんな始まりだった。
彼はいつも突然だ。

ーコーヒと紅茶ならどっちが好き？
俺は．．紅茶に入れるホットミルク派です。

というメールや、

ーパプリカは黄色の方が美味しい！

などと、

実にどうでもいい個人情報勝手にしゃべる。
それにはへえ、などと返していたけれど、そういった何気ないメールでわかった共通趣味がいくつか見つかった。
1番盛り上がったのは部活の話だ。

彼はサッカー少年だった。そしてわたしはサッカー観戦が大好きだった。

ゲームを見るのは楽しい。ハラハラする。
でも、ルールはよくわからない。

だから、テレビで試合を見ているとき、大概彼も同じ試合を見ていたので（わたしが日本代表戦ばかり観ていたから）、解説を求めてメールしたりした。

彼が審判の資格を取得いたためである。

―今解説が言ってた、ハットトリックって何？

―同じヒトが3得点するコト。ほら、さっきので3回。

―ホントだ。じゃあ、オフサイドは？なんとなくはわかるけど見極められない。

―ソレは慣れの問題じゃね？！（笑）

―そうかも（笑）

そんな何気ない会話だった。

はやくから始めた受験勉強の息抜きに楽しんでいた。

そんな会話の延長線のように、彼は言ったのだ。

―ねえ、俺ら付き合ってみない？

そう。いつものように、それは突然受信された。

お願いします

付き合う？

付き合うつて何だ？

会ったこともないのに。

随分とご無沙汰な響きだった。

恋愛経験がないわけではない、異性と付き合ったこともある。

けれど、全て中学レベルで、高校に入ってからには聞かない響きだった。

最後のお付き合いは2年前だったか。

気持ちのついていかなかった自分からフツてしまった。

ひどい終わり方だった。

もう二度と誰かと付き合ったりしたくない。

そう思う程に。

でも、でも、でも。

あれって好きになつてからだよね？

レイくんには好感は抱いているものの、付き合うのに必要な恋愛感情ではないよ。

どうすればいいの。

ー付き合うつてもアレだよ、メル彼になるだけだよ。

追い撃ちのようにメールが届く。

ーメル友と何が違うの？

返信してみた。

「ちょっと込み入った恋愛バナシもさせていただきます。

ラブラブのメール送ってあげるよ（笑）

そういうものなのか。

「どの程度？」

「そーゆこと聞くなよな（汗）恥ずかしいだろお・・・

聞いてはいけなかったらしい。

「ね？どう？」

つまり、今までとかわりなく話すだけ。でも。

「好きなわけじゃないのに？」

「さとみはね？俺はさとみ結構好きだけどね。

さらっと言ってくれるではないか。

「顔も知らないのに？」

「今度写メ送るよ。」

何を言っても無駄だと思った。しかし根本の問題は好きだとか、それ以前に。

みさとに人を信じる気持ちがない。

もう気持ちなんか信じない、目に見えないし。
冷めてると思われるだろうか？

―好きになれなくても？

―俺がさせてやる。

つつつても付き合ったりしたことないからよくわかんないけど。
ダメ？

最初はお試してもいいけど。

そういうのもアリなのか。確か、前の彼もお試していいといってダ
ラダラしていた。
そしてフツた。

同じようにはしたくない。例え彼が状況を変える気でいても。

あれこれと考えを巡らす。

そして気がついた。

わたしは人を信じきっていない。

いつも裏切られてきて、期待するのも嫌になってしまった。

自分が傷つきたくないだけだ。

わかってはいても、歩み寄って離されてしまうことが、恐ろしくて
仕方ない。

それを伝えなければ。

―わたしはあなたをまだそれ程信用できません。

メールだけの間柄だし、怖いから。

かなりぼかした言い方をした。

返信に間があく。

ーそっか！

そうだよな。

会ったことないのに信用できんよな。

ごめん。俺が悪いわ。

そこで一度切れていた。

間を空けず次のメールが届く。

ー今までと変わんなくていいから。

メールしよ。そんだけ。特別じゃないし。

俺がちよつとだけ変えるからさ。嫌なら言つてよ。

ただ、何かあったときに、すぐに話したいと思える人になりたい。
い。

ダメ？

彼はポジティブだった。

そして優しく、近付いてほしい、と言ってきていた。

そういうことなら悪くないかも。付き合うつていったって所詮メールの関係だ。
それなら。

ーわかりました。よろしくお願いします。

贈り物と、

それから2・3日は特に何も変わらなかった。
今まで通りのメール、内容も深くない。

ゆで卵の固さだとか、好きな色だとかの話で、充分楽しく過ごす。

そんな日々に、それは、突然やってきた。
レイの誕生日だ。

メールアドレスに入っていた数字が誕生日かと思って聞いて、数日後だと発覚したので慌てた。

メールで祝うくらいしかできないけれど。
ちよつと、何か違う色を加えたい。

しばらく考えて、わたしは彼が気に入っているという漫画のキャラクタークター（海賊マンガのヒゲをはやした剣士）のイラストを描いて送る事にした。

絵画を習っていたこともあって、絵は苦手じゃない。
それなりに納得したものを写真に撮ってメールする。

気に入るかな？

少しドキドキする。

恋してるみたい。あ、一応メル彼なんだっけ。

しかし、いつもは速い返信が、今日はなかなか来ない。
気がつけば1時間以上経っていた。

もしかして、気に障るような下手さだったかな。
心配になって送った写真をみる。

ああ、ちょっと暗くなってるな。
実物で色にこだわったところ、写ってないな。

迂闊にも写真を確認せずに送ってしまった自分にむしゃくしゃして、
布団の上を転げ回る。
ぐるぐる、ぐるぐる。
ぐるぐるぐるぐる。

「あー・・・」

ひとしきり転がったところで、長く息を吐き出した。
その時、携帯の振動する微かな音が聞こえた。
がば、と起き上がって携帯を開く。
予想通り、レイからだった。

「俺のブログ見た？」

へ？

「ブログ？なんで？」

「見てない」

「じゃあ見て」

文字だけなのに、いつもより冷たい印象。
怖いな。

恐る恐るパソコンを立ち上げ、お気に入り登録されたURLを開く。

「あっ」

トップページが変わっていた。
見覚えのあるイラストが画面いっぱいに広がる。
タイトルは、

『HAPPY BIRTHDAY!!俺!!』

吹き出した。

なんだソレは。

記事を見ると、誕生日で何歳になったという報告と、イラストをブログ友達に貰ってトップを飾ることにした、というものだった。
なんだ。

怒ったわけじゃなかったのか。

少しほつとして、でも。

ーかってにのせてー・・・

わざとひらがなで返信した。

ーイヤだった？(汗)

今度の返信は速い。

ー・・・恥ずかしいから

ーいーじゃん！上手いよ、すごい。

俺の絵は恥ずかしすぎて見せられないけど(笑)

ーえー(笑)そう言われると見てみたい(笑)

ー勘弁してください・・・

今度は彼が萎れる番だった。

見せるだの見せないだの、しばらく問答が続いたあとだった。

ー今日は最高のプレゼントサンキューね！

レイから締めくくるメールが届く。

しかし、文章終わりに表示される、ENDの文字がない。

まだ文章があるらしく、カチカチと下にスクロールしたところで、固まった。

ーさとみのこともっと好きになっちゃったじゃん

え?!あ?!うわっ?!

ナニコレッツ死ぬほど恥ずかしい!!!

落ちて着けワタシ。

ー応メル彼だ。

設定みたいなものはずだ。これくらい・・・。

もう一度、チラッとメールを見る。

ボタン。頭から机に落ちる。

完全に撃沈された。

頭から狼煙が上がりそうだった。

こんな風が変わっていくのか・・・。

みさとは、憂鬱なため息をついた。

ちょっとした変化

結局、あの恥ずかしいメールには返信できず、うやむやにして寝てしまった。

そして今日、

学校に着いた時に何故か思いだして、頬をほのかに染めるハメになる。

だって、だって。

いきなりあんなの。

と思ったところで考え直す。

わたしってそんなにウブだったっけ？

慣れてないっけ？

脳内検索をかける。

・・・うん、こういうタイプのひと、初体験かも。

いわゆる元カレは、大変なヘタレだった。

付き合いはじめてから知ることになるけれど、オタクで、

付き合っていないながら、二次元にしか興味がなかったように思う。

気持ちを伝えられたことなんて、一度もなかった。

だからだろうか？

はじめての感覚に、少し恐怖を覚える。

この人、どこまで入り込んでくるつもりだろう。

からかっているわけじゃないかなあ？

恋愛慣れしてる人で、遊ばれてるんでないといいな。

ネットならいくらでも嘘がつける。

年齢だけでなく、性別まで偽る人がいるように。そもそも、彼が何故いきなり付き合おうなんて言い出したかも不明なのである。

特別な何かがあった覚えもないし。

ふむ、と、みさとは腕組みをした。

いつか聞いてみることにしよう。

「みさと、何考え込んでるのよ」

やや下げぎみの顔を覗き込む長い髪の影響が、視界を薄暗くする。

「綾乃つ。べ、別にい？」

「なあに、真面目に勉強してたわけ？」

目の前に広げられた参考書をつまみ上げて、顔をしかめた。

「わっけわかんない。ってか、理系ってゆう人種のが意味不明！」

そこまで言うか、とわたしは苦笑いを浮かべた。

「なんでわざわざ文系の学校で理系になるんだか。

・・・でも、みさとは難関目指したいんだもんね。」

「うん」

わたしの高校は、私立の女子校だ。

大半が指定校で進学を決める文系重視の学校で、わたしのようにならばほぼ独学になるリスクを背負って理系を選択する生徒は大変珍しい。確か、250人近くいる学年で、両手の指で数えるくらいしかないなかった。

わたしは、その珍しいひとりである。

「理系だと、将来はがつつり働く女だね。カッコいい！
なんか、みさとは旦那様とか要らないって言うタイプみたい」

「えー、そう？」

「じゃあ、例えば、彼氏とか欲しい？」

「……いまはそう欲しくもないな」

「ほらあー！」

綾乃が黄色い声をあげる。メル彼はいますけど、と、みさとは内心ツッコミをしておく。

「ま、相手は将来の話だもんね。
いつか考え変わるかもよ？
まずは進路。

やりたい仕事があるから理系にしたとか？」

「うん……まあ」

「みさとは進路希望秘密主義だからなあ・・・むう」

ぷく、と頬を膨らませて綾乃が顔を近付けてくる。

「いまはいいけどさっ。

いつかはちゃんと教えなさいよ！応援しにくいんだから」

「うん。でもまだ恥ずかしいから・・・。

もうちょっと、夢みてもよさそうと思えたら言う。

それまで許して？」

「わかったわかった。綾乃、応援してるからね！

それで受かんなかったら許さないんだから」

「はは・・・」

応援なんだか脅しなんだか。

綾乃は、わしわしとみさとの髪を乱してから席に戻った。

そういえば、レイって進路だとか、どうなっているんだろう？

これもいつか聞いておかなくちゃな。

お互い邪魔するようではいけないし。

いつの間に、話題が彼に繋がっている。

そんな己の変化には気が付かず、思い立ったらすぐに行動するマイルールに従ってメモをとる。

みさとは、それを筆箱に差し入れて次の授業の準備をした。

ちょっとした変化（後書き）

ようやく章の使い方がわかりましたorz

天使の梯子

一日が終わるのはあつという間だ。
気が付いたら授業が終わっていて、帰りのバスに乗って帰る。
毎日その繰り返し。

みさとは、窓際の席で頬杖をついて座っていた。

暇だなあ・・・。

バスの発車までまだ30分近くあった。

「ド」がつくほど田舎の学校では、バスの本数が信じられないくらい少ない。

帰りは1時間おきに3本のチャンスのみだ。

みさとはぼんやりと空を眺めていた。

持ってきた本は読み切ってしまったし、特にすることもない。

暇だ。

ため息をついたその時、目の前に広がる入道雲を、大きな鳥が横切った。

「あつ」

悠々と飛ぶ翼の広い大きな鳥。

すごい。絵になってる！

宮崎映画のワンシーンみたいだ。

見惚れていると、鳥が旋回してきてまた雲を横切った。

これは、もしかやシャッターチャンスをくれている?!

みさとは慌ててかばんからカメラを取り出すと、電源を入れて目の前で構えた。

もう一度戻ってくるのを待って、タイミングをはかる。

・・・今だ!

カシャ、という音がして、画面に写真が表示された。

「やった・・・」

つい、声が漏れる。

なかなかの傑作だった。

みさとの写真コレクションは、パソコンのデータを全て埋めるくらいある。

全て自分で撮ったもので、ブログに上げたりして楽しんでいる。

『見ていて楽しい』

『幸せになれる』
『癒される』

といった評価が多く、その評価で、みさとも幸せになることができた。

誰かが笑顔になれる、そんなきっかけになるのなら、自分も嬉しい。

それにしても、いい写真が撮れたなあと満足していると、ポケットが振動した。

携帯がメールを受信したらしい。

ーやっほー！

今、ちよつといい写真撮れたからさとみにあげるよ。

入道雲です

レイからだった。

写真が一枚添付してある。ファイルが大きいのか、読み込みに少し時間がかかった。

「わぁ・・・」

携帯で撮ったのだろう、画質はさほど良くないが、みさとは、レイが見せたかった風景がありありと浮かんで見えた。

大きな入道雲、そして一筋の光が雲の間から差ししていて、街の中に淡く溶けているような。

まるで、はちみつを垂らしたような一枚。

この光を、古代の祖先達は、まるで神の通る道のように思ったのだろう。

とてもわかりやすい表現が、今にも伝わっている。

「天使の梯子」が出ていますね。

とっても綺麗。

写真をどうもありがとう。

返信は速い。

「天使の梯子」？

予想通りの返信が来て、みさとはふふ、と笑った。

「雲間から差す光のことです。光のカーテン、綺麗でしょ？」

まるで神の通り道みたいだから、使者の天使を借りて、そういう名前が付きました。

雲の形状には、他にも「風の伯爵婦人」だとか、面白い名前がいくらかあります。

「そうなのかい」。

結構深いんだなあ。

てか、なんでそんな詳しいの（笑）

「・・・趣味だから

「空以外も詳しいよね?!」

ー……………多趣味なんです

うぐ、と詰まりながら、苦し紛れに逃れる。

本や図鑑を読みあさったなんて言いたくない。

が、好きなことならなんでもすぐに覚えられるものなのだ。

ーレイがサッカーに詳しいのと、変わらないよ。

ーなるほどね。

で、さとみはその幅が凄く広いつと（笑）

ーまあ、そういうことかな。

クス、と笑って携帯を閉じ、窓に寄り掛かって目を閉じる。
日当たりの良いバスの中を、まだ少しひんやりとした風が走り抜けた。

天使の梯子（後書き）

空って本当綺麗ですよね。

個人的に、HABUさんというプロ写真家がオススメ。

HP是非見てみてください。

彼ってやつ、悪くないかも

暖かい日差しの中で、うとうとしかけていたみさとは、今のメールのことを考えて薄く目を開けた。

自分がちょうど写真を撮った直後に、レイから写真つきのメールがきたのは本当に偶然だ。

住んでいる場所も、本州のみさとと、と北海道の彼では海を渡るのに、同じタイミングで同じことをしていたことになる。

しかも、それをわざわざメールしてきた。

そこまで考えて、頬がカツと熱くなる。

以心伝心？違うな。

なんか、波長が合う感じ。同じ時に同じこと考えたり、無理に合わせなくていいのってとっても楽。

メル彼、悪くないかも・・・

なんて考えながら、

ほてってしまった頬をペシペシと叩き、冷まそうと努力する。

「いよつす」

ひよっこりと視界に綾乃が現れた。

「隣いい？」

「あ、う、うん」

みさとは慌てて席周辺の荷物を片付けた。

「顔赤くしてどうしたの」

「えっ?! あ、いや、」

声が裏返る。

「もしかして彼氏?!」

ぎくっ。

「・・・なわけないか。みさとだもんねー」

綾乃がけらけらと笑う。

それはどういう意味だ、と苦笑いしながらみさともあるは、と声を出した。

レイは、彼氏とは違うけど、全く違うわけでもない。

バレたらちよっと困るなあ。

説明できない。

仕方なく、今回は適当に繕うことにした。

「日差しで、あつくなっただけ。ずっといるから」

「そかそか」

それで綾乃は興味がなくなったらしく、雑誌を開いて読みはじめる。時々、

「コレかわいくない?!」

みさと似合いそ〜」

なんていいながら見せてきていたが、バスが発車する頃には完全に夢の世界を旅し始めていた。
安らかな寝息が聞こえる。

みさとも、まだ冷え切らない額をひんやりしたガラスにおしあて、仮眠することにした。

終点までの距離は、昼寝するのに十分な時間であった。

楽しみなのはどっち？

家に帰って、今日撮った写真をパソコンに取り込んでみた。

よし、ブレしていない。

みさとは内心ガッツポーズをして、保存する為のファイルを開いた。空の写真のコレクション、全写真の半分が空だ。

そんなにあって何が面白いんだ、と言われることもあるが、晴れの日はもちろん、

雨だって、雪だって、それぞれに表情があって、いくら見ても見飽きないのである。

朝焼けに夕焼けに、と各雲・空ごとにフォルダを作っており、今日の写真は何処に入れようかと悩む。

入道雲、昼の空、奇跡的な一枚、

ど・れ・に・し・よ・う・か・な・・・と、子供遊びの文句を口ずさみながら指差していく。

最後の「り」で、『奇跡的な一枚』に止まった。

「奇跡かなあ」

微妙にしっくり来ないながらも、選びきれないので諦めた。

少し整理をしてフォルダを閉じる。

「あっ」

次に表示されたフォルダをみて、入れ忘れの写真を思い出した。

『天使の梯子』

フォルダ、レイの写真も入れなくては、
せつかくだし。

携帯を取り出し、パソコンに転送して開いてみる。

写真は、手持ちサイズの小さい画面より明るく見えた。

より神々しさが増すような気がして、見つめていると、幸せな気分
に浸れる。

みさとは、思わず、しかし無意識に鼻歌を歌いながら写真をしまっ
た。

パソコンの電源を落として、部屋に戻る。

明日の予習をしなくては、と思つて教科書を開き、ペンを取った。

今日はサッカーのテレビ放送があるから、はやく終わらせたいな。

少し浮かれた気分で勉強を始める。

楽しみの為にいつもよりはやく記憶できたり、時間を短縮したりで
きる事が、

サッカーによるものなのか、その時にするメールのためなのかは、
みさにはわかっていなかった。

苗字と名前

夜19時。

サッカーの試合が始まった。

今日はアップの時からメールをしていた。

ーアップ始まったぜ！

観てる？

ー観てない

ー観てないのかよっ（笑）

なんて言いながら始まって、始まってからは試合の内容を、そして好きな選手の話しなんてしたりする。

ー今蹴った選手好きだなー

ーコーナー？

ーそうそう。カッコよくなあ？

ーああいうのタイプなんだ？

あ、今のオフサイド・・・じゃないのか？審判見てなかったな。

ーそういうんじゃないっつたら（笑）

動きがよくて好きだけです。

オフサイドとか、審判でも見逃すことあるんだ？

ーじゃあタイプの選手おる？

そりゃ、デカいやつが視界を遮ったら見えないし。

ーえー・・・キャプテンとか？（笑）
なるほどねー。

ーとかって何だよ（笑）

ー誠実そうで優しそうな雰囲気してるから、結構好きです。

ーふうん。

ーじゃあ、まだ無名だけど、レイ選手わぁ？（笑）

ーこらっ。

思わず吹き出す。

レイは時々、ふざけてか、このように選手に交えて名前をあげてくる。

ただ遊んでいるだけか、それとも、

ー好きとでも言われたい？

その手には乗りませんよぉ、だ。

ーバレたかぁ！（笑）

残念残念。

ま、いつか。

いつかは本気で好きって言わせてやる！

ーなんでそんなにやる気なの……。

ー俺がさとみを好きだから！

なんてやり取りになると、撃沈されるのはみさとの方だ。

湯気が出るほど赤面して、でも恥ずかしいのでしらっと返信している……ように見せかける。

照れ隠しだなんて、文字だけじゃバレない、バレない。

ーそうそう、あのね、わたしの名前さとみじゃないからね（笑）

信じなさそうだったから言わなかったけど。

ーえ?! 違うの？

つか、いまさら？

じゃあ何？

ーみさとだよ。

み、さと。

ノットさとみ。

ーみの場所が違ったか……。

俺恥ずかしっ（笑）

字は? どう書くの？

ーひらがな。ひらがなで、みさとだよ。

レイは？

ーりょうかーい。

俺はな、玲って書く。

ーカッコいいね

ーさんきゅー／／／

ーあ、それじゃあ、苗字は？

みさとは、まだ玲の苗字を知らなかった。
みさとの苗字も教えていない。

知らなくても何も困らないからだ。
少し時間が空く。

その間に、前半戦が終了していた。
前半ハイライトの途中で返信がくる。

ー苗字は秘密っ。

会えた時に教えるよ。

うわ。

玲は時々このような返しをしてくる。
つるのが上手いというか、焦らし上手だ。

ーじゃあ、わたしの苗字も秘密だよ？

ーうん、いいよ

だから、いつか会おうな。

何を言ってもムダである。

気になるなあ・・・!!

みさとはバタバタと膝を服の裾ではたいた。
なんだかちよつと悔しい。

まるで、手の平で躍らされてるような・・・。

みさとは、やや不満な表情をしながら始まった後半戦を眺めた。

ずっと一緒に

後半の試合は激しいボールの奪い合いもなく、観ていて眠くなる試合だった。

ふあ、と欠伸をしたところでメールが入る。

「試合マンネリ化してんね。解説することもないわ。今日は引き分ける気がする」

「うん、質問もないや（笑）暇だね」

ボールはサイドからサイドへパスされるばかりで、前進も後退もしない。

「そいや、みさとっていつも誰と試合見てんの？メールしてて大丈夫か？」

「誰と？考えたこともなかった。」

「え、ひとりで観てるけど。」

「家族とか一緒じゃないの？」

「うん。玲こそ、メール大丈夫？」

「俺は家族とだし。全員サッカーファンだからな。」

メールはソファに後ろから寄り掛かってしてるから大丈夫。バ
レないよ。

つか、本当にひとりで見てんの？

ー寄り掛かってって、つまり立ちっぱなし?! 疲れない？

ひとりでだよー。

ーサッカー部の足ナメンだよ(笑)

ひとりつまんなくない？

入ったときとかさ、わーってなっても一緒に喜ぶひといないし。

ーそう言われても……。家族は野球派だからねー。

わたしはひとりで充分楽しいけど。

ーなんでみさとだけサッカーになっただんだ?(笑)

そっか。大勢で観るのも楽しいんだけどね。

ーそうなんだ。

あんまりそういう経験ないからちょっとわかんない。ごめんね。

テンポよく行き来していたメールが止まる。

ー・・・みさと、やっぱりひとりじゃねーよ。
俺がいるべ。

ぐさっ。

何か胸に突き刺さる。

何コレ、痛い。

・・・なんで？

とりあえず、返さなきゃ。

ーありがとう。

解説あるから楽しさ倍増です。

ーそーゆう意味じゃないけどな（笑）

そうか、俺の存在は解説目的か（苦笑）まあいいけどね。

大丈夫、俺がずっと一緒に観てるよ。

ぐさっ、ぐさっ。

更に何か刺さる。

どうしよう、泣きたくなってきた。

なんで？

心臓のあたりが痛い。

こんなの、初めて。

どうしたらいいのか、わからない。

何がいけないんだろう、痛みの原因は何？

ーずっと・・・うん。

ありがとう。

返信を打ってから、前屈みになって痛みをこらえる。
うっすら浮かんだ涙も、しばらくしたら治まった。

なんでこんなに泣きたい気持ちなのか、本当にわからない。
画面の中で、結局ドロリーになってしまった試合と同じくらい、すっ
きりしない気持ちを抱えてうづくまる。
みさとにその理由がわかるまで、まだ時間がかかりそうだった。

玲の企み

途中から、みさとの返信の歯切れが悪くなったことには気が付いていた。

ひとりって、どうして。

兄弟の末っ子で、いつも姉と一緒にいて、学校でも、サッカーというグループ型の部活のおかげで、ひとりであることなんて考えたこともなかった。

まさか、サッカー観戦をひとりで？
寂し過ぎる。

家族にバレないように、早々に部屋に戻って、ベッドに倒れ込む。

「なんでだよ・・・」

みさとは寂しいという感情を持ってはいないのだろうか？

否、慣れてしまっている。慣れすぎているから、何とも思わないのだろう。

優しいことにも、楽しいことにも鈍そうだ。

ずっとひとりだったとか？

そうだと過程しよう。

・・・どうして？

思考はそこで途絶えてしまった。

そういえば、付き合おうと提案した時に

「信じられない」

ようなことを言っていた。

それと何か関係があるかもしれない。

聞いたら、みさとの傷に触れるかな？

しかし、知らないままでは、これ以上何も変わらない。

玲は、みさとにひとりでない楽しさを教えたかった。

まず何より、それを知っていてくれないと、サッカーの面白さはそこからなのだ。

みさとにプレーさせたいわけではないけれど。

どーせ、勝手に惚れたのは俺ですよ。

玲は憂鬱なため息を漏らした。

初めて見た写真に、一目惚れして、それを撮った彼女に興味を持った。

試しにコメントをしてみたら、丁寧に返しがあって、その言葉遣いや、対応の丁寧さに惹かれていった。

初めはただの憧憬。

しかし、しばらく通ううちに同い年だと発覚して、もっと近付きたい、と思ってしまう・・・

付き合いたい、なんて言ってしまうことになるのは、玲にも予想できていなかった。

思わず口を滑らせたただけだったのである。

最初は慌てたものの、すぐにその気になってしまっただけで、結局、言いくるめて「お願いします」と言わせてしまったけれど。

会えないし、声も聞けないし、触れない。けれど、それで満足だった。

玲が惚れたのは、みさとの人格だから。いつか会ってみたいとは思うが、焦る必要はない。

玲は起き上がって、携帯を眺めた。

相手が慣れていないなら、自分が慣らしてしまえばいい。

大人っぽいみさとは、いつも冷静な対処してくるが、本当は茹蛸になっていたりして。

慌てること見たいなあ。

玲は想像して、ひとりクスクスと笑った。

さあ、次は何て返そうかな？

ちょっと甘く、

もっと優しく。

風邪ひきみさと

くしゅっ。

くしゅん。

詰まった息を戻す為に、深呼吸をする。

くしゅっ

まだだ。

何か、おかしいな。

みさとは止まらないくしゃみに違和感を感じながら家を出た。

風邪ひいたかな？

今日はやけに寒いなあ。

3月なのに、風が肌寒い。時々吹く強い風に、身震いして自分を抱きしめた。

「みさとーお、風邪？」

ぶるっと肩を震わせてくしゃみを重ねるみさとを、背後からぎゅっと抱きしめるようにして綾乃が囁く。

「うわっ」

「そんな驚くなっ」

「い、いめん」

あはは、と綾乃が笑うので、みさとの身体も一緒に振れた。

あれ。頭に響くぞ？

「くしゃみだいじょーぶ？」

「大丈夫・・・じゃないかも。朝から止まらなくて」

むー、と言いながら綾乃がみさとの額に手を当てる。

「ちよつと熱っぽい気もするけど・・・お医者さんじゃないからわかんないなあ・・・」

「はは、だよな。大丈夫大丈夫。辛くなったらちゃんと休むから」

「無理しないでよ〜？」

少し眉の間に谷間を作って綾乃が腕組みをする。

「うん、ありがとう」

それから午前の授業を片し、体育だつてこなした。

、、、までは良かったのだが。

「ちよつ、みさと?!」

午後の講義で教室棟移動中に、綾乃がみさとの異常に気がついた。色白のみさとが頬を薄く染めて、ぼんやりふらふらとしていたのである。

「なんかぼんやりしてるけど大丈夫?!」

・・・ぼんやりはいつもか。

じゃなくって!保健室っ」

体育会系の綾乃がしっかりと肩を支えて、みさとを保健室に担ぎ込んだ。

「うん、熱があるわね」

保健室の教員が呆れたように言うのを、みさとはぼんやり聞いていた。

「わたしの見解では帰ったほうがいいけれど、どうする?」

尋ねられて、ぼんやりする頭で考える。

「次の授業出なきゃ・・・」

「何言ってるの?!」

綾乃が驚いたように言ってみさとに近付いてくる。

「鏡見なさい、鏡！」

顔真っ赤じゃないのよ」

「え」

「いいから寝てるッ！」

どうせバスはないし、1時間寝てれば少しはマシでしょ?」

そう言つて、ベッドに座らされているみさとを無理矢理押し倒し、頭から布団を被せ、その上にわざわざ他のベッドから集めたまくらを積み上げる。

重しのつもりか。

「じゃあ先生、帰りに迎えにくるんでよろしくお願いしますッ」

そのままいなくなってしまうた。

「むぐぐ」

積み上げられたまくらが衰弱したみさとには思いの外重く、苦勞して顔だけなんとか外に出す。

「ぶはっ」

その様子を見ていた教員が、笑いながら残りのまくらをどけてくれ

た。

「いい友達ね」

「・・・はい」

「高校の友達は一生ものよ。大切になさいね」

みさとはそれには答えず、綾乃のいなくなった扉を見ながら、
はなんとなく寂しいような、
嬉しいような感覚に捕われていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3753s/>

空を飛びかう手紙

2012年1月14日21時56分発行